

蘇北人蔑視に関する調査

陳中亚 應延甲
許志遠 吳立江
(翻訳) 樋山健介

蘇北人蔑視は長い間上海に存在する社会問題のひとつである。しかし今まで、社会学の嚴肅な課題としてこれを全面的に系統だって研究し考察したものは極めて少ない。この問題を解決することは、社会の安定を促進し、精神文明を向上させることに結びつく和我々は考える。そのため昨年5月、市公安局、市タクシー公司、静安区民政局等の協力と支持を受け、蘇北人問題に対し社会調査を行った。

(1)

蘇北人蔑視は、現実社会のいたる所で目にすることができる。家庭、職場を問わず、乗り物、病院、食堂、劇場等の公共の場所で、蘇北人について議論したり、はなはだしくは公然と輕蔑したり、からかったりしているのに出くわす。特に農村から上海に身内を訪ねたり、出張に来たばかりの蘇北人は「蘇北人蔑視者」のからかいの対象とされ、その人格、尊嚴は如何ともしがたい侮辱を受ける。またある種の喜劇等の中でも、蘇北人をからかう内容やせりふが見うけられる。

蘇北人蔑視は、恋愛結婚問題に際立って現われる。非蘇北籍と蘇北籍の青年同士の場合、家庭と社会からの圧力は強い。多くの青年が結婚対象を選ぶ際、相手の籍を重要な問題とし、それが蘇北とわかったら、会うことさえしない場合もある。全市に開放されている静安区万航街道三義坊結婚紹介所では、「相手の原籍に対する要求」欄で登録者の多くが「蘇北人を除く」、「南方人」、「蘇北人お断り」等と書いている。このことから一般社会で蘇北人がいかに蔑視されているか、その程度が見てとれる。

蘇北人に対する蔑視は、社会に以下のような

くつかの問題を持たらす。

① 蘇北籍の青年に心理的抑圧感を持たらす。一部の蘇北籍の者は家庭や蘇北人集中居住区以外では、蘇北語を話したがらず、自分の籍をふせたがる。はなはだしい場合は、自分の籍をきちんと書き込む必要のある正式書類にさえも、「江蘇」とのみ書き、具体的な県名は省略したり、また、あっさり「上海」等とうそを書いたりする者もいる。

② 蘇北籍の青年は恋愛結婚の際、原籍の問題でしばしば挫折する。特に、原因が恋愛相手だけではなく、家庭や世論によるものと彼らが身を持って感じた時、彼らの苦痛は増し、その仕事、学習、生活は影響を受け、なかには自暴自棄になる者もいる。

③ ある蘇北籍の者の心理には非蘇北籍の者に対する対立感情が生じ、それが矛盾の衝突へと転化され、容易には解決できない場合もある。

(2)

蘇北人蔑視問題の発生、存在には歴史的な原因と現実的な原因がある。これをきちんと解決するには、歴史的に溯って問題を見る必要がある。

上海の蘇北籍住民は他の原籍の住民と雑居しており、原籍がわからない場合は、普通その方言により蘇北人か否かが判断される。上海に住む蘇北人の方言は、言語分類上、淮(安)揚(州)官話と呼ばれ、その使用地区の南限は南京から東に向かい鎮江、泰江、如皋、如東を経て黄海に至る線で、北限は江蘇省の泗陽から西へ安徽、江蘇の省境に至り、東へ漣水、濱海を経て黄海に至る線である。東の境界は黄海、西の境界は安徽、江蘇の省境となる。

上述の地区は、大部分が黄淮平原東南部に位置

し、解放前は水利工事が行われず、淮河流域が豪雨にあうと、極めて洪水の発生しやすい地区であった。その他、旱害、虫害、兵馬に荒され、地主の搾取もひどく、この地区はたび重なり破壊された。最大の被害を受けた一部の貧農と破産した手工業者はやむを得ず離村し、生きる道を探し求めた。当時、上海はすでに全国最大の商工業都市で、かなりの人口包容力を有し、就業機会も多かった。そこで大量の蘇北難民が流入した。

上海の蘇北人には、その他の理由による者もいた。土地改革闘争を避けて来た地主、富農。勉学のためやって来た知識人、壮丁の徴発を逃れて来た青壮年等。しかしこれらは少数にすぎず、その主体はやはり貧雇農と下層中農により構成されていた。

＜職業構成＞

上海に避難して来た大多数の蘇北人は、資金も技術もなく、「店員になるにも保証人がおらず、工場で働くにもつてがない」。したがって報酬の少ない、人の嫌がる単純な肉体労働に従事するより仕方がなかった。例えば人力車夫、大八車での運搬、その後出現した三輪車、港での荷揚げ夫、そして浴場、理髪、清掃等のサービス業、それにバラックの住民のためにできて来た元手と利益の少ない露天商等。

わが国の勤労者の職業はあまり変動しないし、それに親族内での交代が政策としてとられているため、上述の蘇北人の職業構成の特殊性は解放後まで続き、今日に至ってもなお非常にはっきりとしている。例えば、三輪車という職業は、上海では1959年に23,679人が従事していたが、そのうち蘇北籍の労働者が18,217人、総数の76.94%を占めていた。清掃業も同様で、82年5月の閘北区清掃衛生管理所の1,785人の労働者のうち、蘇北人が1,036人、58.04%を占め、全市の総人口に占める蘇北人の比率よりはるかに高く、閘北区の蘇北人の比率32.79%よりも高い。

＜経済条件＞

蘇北人が従事しているこれらの職業は、解放前、その社会的地位は低く、収入も少なかった。

解放後行った361人の港湾労働者に対する調査によれば、そのうち149名が当時家庭を持てず、その数は被調査者の40%を占めていた。清掃労働者も例外ではなく、清掃管理所の古参労働者の回顧によると、解放前、清掃労働者になっても1日2、3升の米しか手に入らず、全く生活のしようがなく、仕事が終わると傘や鞋の修理に出かけ、なんとか一家を支えるよりほかはなかった。さらにひどい場合には、生活の保障がないので、一旦病気になるたり、年老いたりして働くことができなくなると、死神の来迎を待つよりほかはなかったのである。

解放後、蘇北人も他の労働者のように、政治・経済的には解放され、生活は大いに改善された。しかし、彼らの経済的基盤は弱く、わが国の経済もまだわりと遅れており、経済条件が好転するにはもう少しの過程が必要である。このため、蘇北人の経済水準は相対的にまだ低い方に属している。

＜居住環境＞

解放前、人々の居住条件は一貫して社会の経済的地位と関係していた。上海の蘇北人の職業構成と収入が、最も条件の劣った地区、家屋での居住、生活を決定づけていた。この点は今に至ってもまだ明らかにその痕跡を留めている。上海市の地図を見ると、蘇北人が30%を越す地域は、いずれも市街区のふちに沿った中山路一帯である。これらの場所は、解放前の租界の外にあたり、市の中心地から遠く、駅、港、鉄道、河川、工場等に近く、商業も未発達で、外観も荒れ、騒音や環境汚染のひどい場所であった。蘇北人がこれらの地区に集まったのは、就業機会が比較的多かったことと、市中心区は家賃が高く、手が出なかったことによる。また、環境の劣った市街区の縁に住んでいた蘇北人もいたが、彼らは三輪車、理髪、浴場等の

仕事に従事し、市の中心部で生計を立てなければならなかったためである。

居住条件を見ると、蘇北人が30%以上を占める地域は、一般的に、解放前の有名なバラック地区である。例えば閘北区の天目西路と漢中地域の一部は、歴史的には広い意味での「蕃瓜弄（カボチャ小路）」に属している。普陀区の朱家湾と中山地域は、解放前の朱家湾、潘家湾、譚子湾の三つのバラック地区が含まれている。薬水小路は普陀区胶州地域に属す。これらのバラックは主としてわらぶき小屋から成り、汚れてぼろぼろで、暗く湿り、極めて狭い。人口が密集し、水道、電気、道路等市政の設備はほとんどなかった。解放後、党と各級の人民政府が多くのバラック地区に対し改善を進め、国も計画的に住宅を建て、一部のバラック住民は新居に移った。その他の大部分のバラック住民も経済条件が良くなるにつれ、自費で簡易住宅を作ったりし、居住条件と衛生環境もある程度改善された。しかし、現在の状況を見たと、蘇北人集中居住地区の大部分は、いまだに全市で社会文化福祉施設が最も少なく、居住条件が最も劣り、人口密度が最も高く、一部の人に「下只角（スラム街）」と呼ばれている。

＜教育水準＞

解放前、学校に上がるには高い学費を支払わねばならなかった。上海の蘇北人は多くがもともと教育を受けたことがなく、上海に来た後も収入が少なく、子弟を学校にやる力がなかった。このため、彼らの教育水準は一般的に低かった。解放後、若い世代は学校に行く機会ができたが、わが国の現状では、教育は家庭の影響を強く受ける。両親の職業によって教育や教養をどのくらい重視するかが決定され、それによって子弟にどのくらいの家庭教育を行うかも決定される。したがって蘇北人の若い世代は、教育水準が一般的にその他の原籍の同世代より低い。上海市の重点中学復旦附属中学と全国重点大学の復旦大学外国語学部に対す

る我々の調査によれば、復旦附属中学の1981年度卒業生 440 名のうち、蘇北籍学生は59名にすぎず、13.42 %である。82年の復旦大学外国語学部の在校生 179 名のうち、蘇北人は19名にすぎず、10.61 %で、いずれも上海の蘇北人の比率よりはるかに低い。さらに市の関係部門が行った戸籍カードのサンプル調査のデータからも、上海の蘇北人の大学生、高校生の比率は明らかに低く、文盲の比率は高い。このような状況が彼らの精神状態に影響を与えているし、また次の世代の職業構成にも影響を及ぼす。

ある時代の支配的地位を占めるイデオロギーは支配階級のものであり、搾取制度のもとでは勤労人民、特に最下層は常に特殊な差別を受ける。上海在住の蘇北人は、職業構成、経済条件、居住環境、教養水準を問わず、解放前はいずれも最下層に属していた。このため、蘇北人蔑視と戯画化が、抑圧的な旧社会に出現したことは不思議ではない。

しかしながら、蘇北人蔑視という旧社会が残した問題が、依然として解放後の新しい社会でも一定の位置を持っている。特にここ数年、この問題の出現が顕著になっている。これには、搾取階級の腐敗した意識がいまだに人々に残っているということの他に、一定の現実的理由が存在する。その中には、注目すべきものはいくつかある。

①「金銭第一主義」という考え方

3 中全会以降、党中央は対外開放政策を実行している。これはわが国の国民経済を発展させる正しい方針である。ところが、10年の内乱により、一部分の人間の思想的自覚が低下したことで、それに宣伝工作上のいくつかの欠点により、ブルジョアジーの腐敗した意識の侵蝕に抵抗力を弱めた人間が増え、一時的に「金銭第一主義」の傾向が社会に現われている。このような考え方の出現が経済、生活水準のわりと低い蘇北人に対する蔑視をもたらしたのである。特に物質条件が最も敏感

に反映する青年の恋愛結婚問題に最も顕著に現われて来ている。

② 文化的後進性

わが国の社会的生産力があまり発達していないことと、10年の内乱時にはやった「読書無用論」の影響により、文化的後進性がもたらされ、このことが蘇北人蔑視と密接に関係している。「蘇北人蔑視者」は愚昧と無知に左右され、人と人との関係、特に社会主義制度のもとでは人と人との関係は平等であり、お互いに尊重し合うべきだということがわからず、最も基本的な啓蒙教育に欠けている。このような人々は人格と人権について自我意識がなく、自分を顧みて人のことを推し量ることもできない。これは最も簡単に古い意識、不健全な思潮と結びついてしまう。この点に関しては、一定の根拠がある。我々の全調査の中で、蘇北籍の青年と恋愛をしたくないという大学レベルの教育のある青年は極めて少なかった。

③ 思考方法の問題

蘇北人を軽蔑する者がいるが、これは完全に誤まった思考方法によるものである。この思考方法とは「一部で全体を評価する」考え方である。

アンケートに対し、「一般的に蘇北人は軽蔑されているが、しかし一概に論ずることはできない。中には良い蘇北人も個別にいる。」と答えている者がいた。この言い方は誤まりだと我々は考える。いわゆる個別とは、仮りにそれを10%としよう。それでは上海の170万人近くの蘇北人のうち、150万余りがこの「個別」の中に入らず、悪い蘇北人になってしまう。このようなことが想像できるであろうか。彼は、かつて蘇北人と接触した中で個々の蘇北人に存在する欠点を発見したのかも知れない。しかし、どうしてそれを大多数の蘇北人に拡大することができるであろうか。

④ その他の原因

例えば、この問題に関する新聞の不謹慎な態度と文芸団体の不まじめな表現等、主として宣伝活

動に存在するいくつかの問題がある。そのうち、特にユーモア演芸の出し物の影響が最も悪く、最も広く、我々の調査過程で出された人々の意見も最も強い。我々の分析では、いくつかの文化団体の構成員の芸術的修養が劣っているためで、生活の中の現象を選択せずにそのまま舞台に持ち込み、蘇北人に対する戯画化、蘇北語に対する歪曲から作り出した笑いにより、文化的におくれた、低俗趣味を求める一部の卑俗な人間の好みに迎合している。これは文芸工作者としては、はなはだしく無責任な態度であり、自己の仕事の性格を全く理解していないと言える。報道の不謹慎な態度、文芸団体の無意識の蘇北人戯画化は、社会の偏見と関係がある。それどころか、この偏見を助長する役割を果たしている。

(3)

わが国は社会主義国家であり、いかなる差別をも許さない。蘇北人蔑視という不正常的な社会現象はすみやかに社会から葬りさるべきである。わが国の社会的性質、党と政府、憲法が主張する人々の平等は、いかなる形式の民族差別、地方差別にも反対しているし、またこのことは我々がこの問題を解決するために、確かな保証とよりどころを与えてくれる。

わが国の発展の趨勢からして、物質的条件と精神文化の絶えざる改善と向上にともない、蘇北人蔑視という問題も次第に解決されるであろう。この問題の解決を早めるため、以下の意見を提起し、関係部門の参考に供したい。

① 宣伝と教育の強化

趙紫陽総理が精神文明について述べた時、「我々、社会構成員は、人民内部の……関係の問題を処理する際、互いに尊重し、関心をはらい、団結し、助けあうことが必要である」と指摘している。蘇北人であれ、いかなる原籍の人であれ、彼らに対する蔑視は非文明的行為である。上海の特殊状況では、蘇北人蔑視の除去を社会主義精神文明建設のひとつの重要な内容として、宣伝し教育しな

なければならない。搾取階級の思想、意識に対する批判を通じて、「蘇北人蔑視者」に世論の圧力を与えよう。蘇北人蔑視の行為がはなはだしい職場や各結婚相談所は、この方面の宣伝を一層強めなければならない。

② 職業構成の改変

現在人民大衆の思想的自覚がまだ不充分であることを考慮し、各級の政府指導部門は各種の職業が社会生活の正常な運行にいずれも欠かすことのできないものであることを宣伝するとともに、可能なかぎり企業が新従業員の募集や老従業員の退職、子弟の交代就職等の折、意識的に計画的にくつかの適切な調整を行い、蘇北人の職業構成の特殊な状況の改変を速めるようにすべきである。

③ 居住環境の改善

住宅不足は上海の深刻な社会問題である。一気に住宅問題を解決しようとしても不可能である。しかし、蘇北人はかなりの部分がかつてのバラック地区から発展した地区に居住しており、居住条

件は全市で最も劣っている。関係部門が都市改造と新住宅の建設を計画する際、居住条件の最も劣った地区の改造を優先的に考慮するよう希望する。同時に、住宅を分配する時、蘇北人の集中居住を意識的に改める。このことにより蘇北人との原籍の住民間の理解と交流を深める。このようにすると、すでに形成されている偏見の除去に有利である。

④ 偏見の人為的産出の禁止

蘇北人に対する文化団体の戯画化は、社会の偏見を人為的に拡大している。各級文化宣伝部門の指導者がこのことを重視し、有力な措置を定め、検査と監督を常に行い、このような現象を除去し、その再発を防止するよう希望する。偏見の人為的産出の除去はそう難しいことではない。鍵は指導者がこのことを十分に重視することにある。

原題 「关于歧视苏北人情况的调查」

原載 「社会」1983年3期（上海大学文学院《社会》編集部）

今天 語録

長江船の旅

この3月、1200トン余りの船で中国に旅をする機会を得た。勤務している大学が毎年実施してきた研修航海の訪問先に、今年度は中国が選ばれ、90名の学生団員に同行する20名の団役員のひとりに加えられたからであった。一行は天草の三角港を出ると、まず天津に向かい、低気圧のもとで荒れる海に翻弄されながら、三日がかりでたどりついた。天津新港は海河の河口にあり、ひどく奥行きが深い。

このあと団は北京、西安、洛陽、鄭州、上海、蘇州を巡り、黄浦江上で再び船に乗った。鑑真号がちょうど棧橋に着いていたが、こちらは接岸できず、夜の暗い江上でフェリーを使っ

て乗り移った。上海を出ると最後の訪問地は南京である。この旅程は魅力あるものであったが天候には恵まれず、ひたすら対岸の見えぬ茫洋とした眺めのなかで、夜間は投錨、停船することもある。上りに二日、下りに一日半の時間を過ごした。

ところで、天津でも上海でも、新しい航路図はなく、操舵室に広げられた地図は、かつて日本軍が作ったものの改定版のようであった。長江上ではまったく地図は無く、パイロットに任せ切りとなる。しばしば小型船が前をのんびりと横切り、船は急いで速力を落とす。長江も都市の道路に似ていたのであった。

(な)